呉秀三先生の生涯と業績

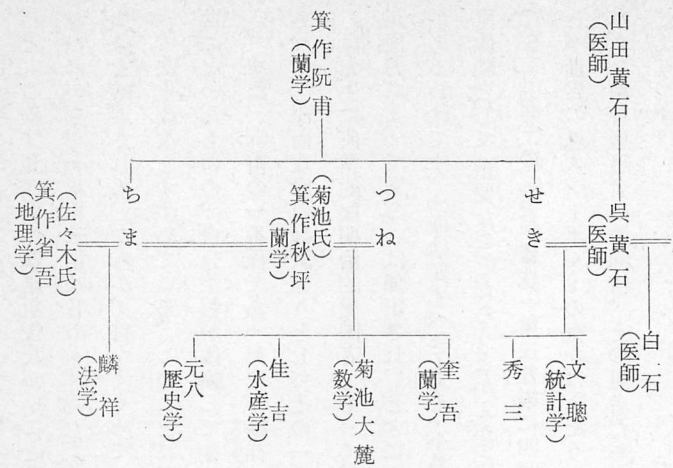
岡田靖雄

呉秀三先生のお仕事としておおきなものには、精神科医療・精神病学に関するものと、医学史に関するものとがあり、それから統計学に関するお仕事も、比重はちいさいとはいえみのがせません。司会者としてわたしは、こういう先生のお仕事のよってきたる渕源をさぐり、またこれらのお仕事が先生の生涯のなかでどのようにからみあって発展してきたか、みたいとおもいます。(1)

1

まず呉家・箕作家系図抄をごらんください。呉先生の人としての形成をみるため、この家系図にあげてあるのは、先生より年齢がうえの人のうちの一部分だけにしてあります。この家系図は従来、優秀家系の例としてその遺伝面が強調されてきたものですが、わたしは家庭環境としての面を強調したいのです。山田黄石先生、呉黄石先生と先生の父系は医者の家です。外祖父紫川箕作阮甫先生も医者ですが、むしろ蘭学者というほうがあたっております。紫川先生がなくなったのは一八六三年（文久三年）、先生の誕生にさきだつこと一年半ですが、先生は「日本医学史の序」（富士川游『日本医学史』、一九〇四年初版）に、「余も代々医者たる家に生れ母の一家にも医者が多くあったから余自身も今では医者となり済ましたが幼き頃は文学が好きで歴史地理の事は外祖父紫川先生の好かれたることにもあり殊更に興味を覚えて読もし作りもしたことがある」とかいております。先生にとくに影響をあたえたのは、三歳上の従兄箕作元八で、小学校のころ叔父箕作秋

呉家・箕作家系図抄



坪のところにとまりにいっては元八から、わが国の歴史、源平二氏のことなどかたりきかされ、武者絵をかいてもらったりもしたことを、先生は「文学博士箕作元八君ノ事ヲ記ス」（東洋学芸雑誌、第三六巻第四五九号、一九一九年）にしるしております。元八は東京大学で動物学をおさめましたが、留学中に目がわるいので歴史学に転じました。歴史学一般への志を先生にうえつけたのは、紫川先生への憧れと従兄元八とであります。

さらに、シーボルト、華岡青洲、本間玄調、小關三英のことなどを父君、母堂からきかされていたことを先生はあちこちにのべておられます。[2] 先生がきかされていたものは、父君・母堂が見聞きした、単なるえらい人のお話しではなくて、そういうえらい人たちが蘭学弾圧下にあっていかにくるしみ・いかにおびえながら研究をつづけ・いきてきたか、という歴史でありました。いわゆるシーボルト事件にさいしてのシーボルトの苦しみ、阮甫が蘭書を音読しようとすると子供たちがその口をふさごうと・その袖をひこうとはしりよったこと、小關三英がその言説のために禍いにあったことなどを、具体的にきかされて先生はそだった。先生の姉岩崎ゆき子がかたったところ（『呉黄石先生小伝』、呉秀三、一九一七年）では、父君黄石先生の帰りがおそいと、「御父さんはドウしなすつたらう、捕まつて首でも取られなさりはしないか」などと、おそくな

っても御飯もたべずに心配していた、という。

先生の叔父箕作秋坪は維新後ながいこと公職につかなかった。それは、幕使にしたがって福澤諭吉などとともにヨーロッパにいき、一八六三年はじめ（文久二年一二月）にかえってきたところ、尊王攘夷の世の中で、かの地で見聞してきた新知識を歓迎されるどころか、首をすくめていなくてはならなかった、しかもその攘夷の旗をふったやからがいま天下をとって欧化政策をすすめている、このことに疑問をもったからです。[3] 箕作一族にとって、自分たちの学問がもてはやされる世になったものの、自分たちが体験してきた蘭学への弾圧・尊王攘夷の嵐をおもうと、すなおにうれしがってもいられない。また、阮甫の一番孫であった箕作麟祥（りんしょう）は、そのあまりの語学の才のため、自分のすきな学問の道をえらぶことをゆるされず、明治政府の翻訳係りとしてその一生をおわらされております。[4]

呉先生は典型的な明治的愛国者であって、体制批判の言は決してはかれなかった。だがその心の奥には、ただしい学問が権力によってあるいは弾圧され、ときにはもてはやされるという歴史が一族の具体的な動きとしてかたりつがれたものがあるわけです。「権は変ずべきも学は不易なり」といった意識が箕作一族にあったのではないか。このあたりが先生の原体験として重要なことだろうとかんがえます。晩年における先生のシーボルト研究の本格的再出発点は、一九二四年（大正一三年）の『史学雑誌』第三五編に四回にわたって掲載された「所謂シーボルト事件」であります。これをよみますと、斯界の恩人シーボルトの冤をはらそうという志こそが、先生のシーボルト研究の原動力であったことがわかります。不幸な精神病患者への同情、その患者たちをすててかえりみない国家・社会への批判のはげしさも、おなじ根をもっていたようです。

先生の令兄呉文聰（あやとし）先生は、わが国における統計学の創始者杉亨二のあとをうけて官庁の統計制度を確立させ、わが国に統計学を確実に根づかせた人であります。令兄が正院外史所管政表課――統計が「政表」ともよばれていた時代ですが――政表課で杉のもとにはいったときは、従兄の箕作麟祥に口をきいてもらっていますが、この麟祥は一八七四年（明治七年）

に『統計学――一名国勢略論』を訳した人でもあります。先生がエステルレンの『医学統計論』を訳したり医学統計についていくつかの論文をかいたりしているのは、一つはもちろん令兄の影響ですが、『医学統計論』という本の選択は、森林太郎のすすめによるものかもしれないという可能性をかんがえる必要があります。[5] 精神病学者としての先生はしばしば統計的手法をもちいております。精神科医療に関する先生の第一論文「日本ノ不具者」（国家医学会雑誌、第四五号、第四六号、一八九一年）は、一八八〇年に杉亨二のもとに統計課の全員――とうぜん令兄もはいっていますが――全員でおこなった甲斐国現在人別調（一九二〇年にはじめておこなわれることになる国勢調査の予備調査）にもとづき論じているものです。精神科医療・精神病学における先生の最大の業績である樫田五郎との共著「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」（東京医学会雑誌、第三二巻、一九一八年）には、はっきり「統計」とはいっています。[6] これだけでなく、精神科医療に関する先生の論文はつねに、天下国家の立ち場から統計数字をあげて論じております。すると先生にあっては統計とは、単なる手法、令兄からの偶然的影響ではなくて、わが国における精神疾患患者の問題をひろい立ち場からみるという本質的視点を提供していることがわかります。

2

先生は文学ずき・歴史ずきで、医者になりたくなかった。先生は東京大学医学部予科に一八七九年（明治一二年）にはいり、予科はのち予備門に統合されていますが、予備門から一八八五年（明治一八年）に医学部本科にすすむまえに、文科に転じようとした。のちにドイツ文学者となった菅虎雄（すが）および藤代禎輔が予科、予備門と先生といっしょで、ともに文科にうつる相談をした。先生は令兄、叔父箕作秋坪、従兄菊池大麓などに反対されて、けっきょく医科にすすんだのですが、菅、藤代は文科に転じました。[7]

先生が医学のなかでなぜ精神病学をえらんだかについては、一つは生理の大澤謙二教授の脳髄生理に興味をもった、と

先生はのべています。[8] また、先生より一年上で、のちに耳鼻咽喉科学担任の教授となった岡田和一郎、――岡田夫人徳子は精神病学担任の榊俶教授の妹です、また、岡田も先生も学生時代から東京医学会の雑誌委員をしていました、――この岡田が、義兄の精神病学教室にはいるよう先生をさそった、とのべています。[9] さらに、文科への志をもった人が医者になると精神科をえらぶという、現在に共通している一般的傾向が先生のばあいもはたらいていたでしょう。そして、いまものべましたように、先生の精神病学には、統計学的視点、というよりは「スタチスチック」のふるい訳語の一つをつかって、「国勢学」的視点がはいっていました。

歴史をやりたかったものが医者となって医学史をやり医史学者となるのは、ま、とうぜんのなりゆきです。じゃ、具体的に先生がいつごろから医学史に関心をもちだしたか。菅虎雄は「呉秀三君を憶ふ」(『呉秀三小伝』、呉博士伝記編纂会、一九三三年)に、先生がかりてきたシーボルトの日本研究の書をおもしろくよんだことをかたっています。それがいつと年代はのべられていませんが、二人が下宿をともにしていたころとすると、予備門時代になります。

医学部、医科大学での同級生には土肥慶蔵、それから『日本産科叢書』の編集に手をかした増田知正がおります(一年上には關場不二彦がおります)。土肥が「日本医学史序」にかいているところでは、呉「芳溪好ミテ医史ヲ講ジ余モ亦我国医史ノ欠ゲテ備ハラザルヲ歎ジ遂ニ二人胥謀リ起テ之ヲ修メントス」という時期に、先生と同郷の富士川游先生がたずねてきたのです。土肥と同宿していたところに富士川先生が先生をはじめてたずねてきたのはいつごろか、一八八八年(明治二一年)の暮れちかくか翌年のはやいころであったろう、とわたしは推定しています。[10] 富士川先生とは、ともに核となりあって、それぞれの医学史への志を結晶させていき、一八九二年(明治二五年)はじめから二人でかわるがわる『中外医事新報』に医学史に関する文章を系統的にのせるようになります。

あとは年譜をおってください。また著作量の表をみてください。一八九六年(明治二九年)に助教授となり、翌年榊教授の死去につづいてヨーロッパに留学し、かえって精神病学担任の帝国大学医科大学教授および東京府巣鴨病院長とな

年譜抄

一八六五年　三月一四日（旧二月一七日）にうまる
一八八五年（二〇歳）　予備門より医学部本科にすすむ
一八八八年（二三歳）　年末か翌年はじめ富士川游とあいしる
一八八九年（二四歳）
一八九〇年（二五歳）　医科大学卒業
一八九二年（二七歳）　三浦ミナと結婚
　富士川とともに『中外医事新報』に医学史につきかきはじめる
一八九四年（二九歳）
一八九五年（三〇歳）
一八九六年（三一歳）　医科大学助教授
　芸備医学会創立
一八九七年（三二歳）　榊俶教授没して、留学
一九〇〇年（三五歳）　○精神病者監護法公布
　医学博士の学位をうく
一九〇一年（三六歳）

（下段は主要著作）

『医学統計論』、『精神啓微』
「精神病者ノ自殺症ニ就キテ」、『精神病学集要』前編
『精神病学集要』後編、『日本産科叢書』
『シーボルト』初版

り、日本神経学会や精神病者慈善救治会を創立したりすると、医学史にさける時間はなくなる。『呉氏医聖堂叢書』（呉秀三、一九二三年）の序には、我邦医学歴史の材料をあつめたが、「其後志望ヲ編史ニ絶チタルヨリ」これらの材料はたいてい放擲した、と、また「日本医学史の序」には「然し恥かしながら余は前に文学の研究を思ひ止まつたと同じく其後又今も専門とする精神病学にて学問上の興味を加へたるに従つて次第に医史的研究の方には遠ざかつて来た」とあります。医学史への志望をたったというのが留学前か帰国後か、放擲したという図書のほとんどは富士川先生にいったのでしょう。[11] 帰国後の先生のお仕事の中心が精神科医療および精神病学であるのはとうぜんです。その頂点が、さきにも名をあげました樫田五郎との共著「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」（一九一八

帰朝して、医科大学教授、巣鴨病院医長
一九〇二年（三七歳）
日本神経学会、精神病者慈善救治会を設立
一九〇四年（三九歳）
巣鴨病院長
一九〇五年（四〇歳）
一九〇六年（四一歳）
一九〇七年（四二歳）
音羽養生所設立
一九〇九年（四四歳）
このころより腎炎？
一九一〇年（四五歳）
私宅監置調査をはじめる
一九一一年（四六歳）
箕作阮甫先生贈位奉告祭
一九一二年（四七歳）
腎炎顕症、ミナ夫人没
一九一三年（四八歳）
一九一四年（四九歳）
大学構内に外来診察所なる
本多光子と再婚
一九一六年（五一歳）
精神病科病室なる
○保健衛生調査会設置

『日本医学叢書』第一巻
『日本医学叢書』第二巻

「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」
『箕作阮甫』

『精神病学集要』第二版前編

年）であり、また、巣鴨病院の経営およびその松沢村への移転、本郷の大学構内に精神病科の外来診察所および病室をなんとかもうけさせることに先生の力がそそがれました。

一九一九年に精神病院法が成立し、同年に東京府巣鴨病院は移転して東京府立松沢病院となりましたが、先生があれだけはげしく批判した私宅監置の法的裏付けである精神病者監護法は改正されることもない。こののち先生は精神科医療についての発言はほとんどされず、精神病学者であるよりは医史学者としていきます。先生の助手時代の著作『精神病学集要』前編・後編（一八九四、九五年）を全面的に増補改訂した『精神病学集要』第二版は一九一六年（大正五年）にその前編をだし、後編は一九一八年から一九二五年――先生退官の年です――にかけて第三冊までだしています

一九一七年（五二歳）
糖尿病併発
一九一八年（五三歳）

一九一九年（五四歳）
○精神病院法公布
末子富子死去
巣鴨病院は移転して松沢病院
一九二〇年（五五歳）
ヨーロッパ、アメリカへ出張
一九二三年（五八歳）

一九二四年（五九歳）
一九二五年（六〇歳）
教授、院長を定年退官、退職
一九二六年（六一歳）

一九二七年（六二歳）
日本医史学会創立、理事長
一九二六年（六三歳）
一九二九年（六四歳）

一九三一年（六六歳）
一九三二年（六七歳）
三月二六日没

『東洞全集』、「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」（樫田五郎と共著）、『精神病学集要』第二版後編第一冊
『呉氏医聖堂叢書』、『精神病学集要』第二版後編第二冊、『華岡青洲先生及其外科』
シーボルト関係論文四編
『精神病学集要』第二版後編第三冊（あと未刊）
『シーボルト先生　其生涯及功業』第二版
『ケンプェル江戸参府紀行』上巻
『ケンプェル江戸参府紀行』下巻、
『シーボルト日本交通貿易史』
「洋学の発展と明治維新」
『シーボルト江戸参府紀行』

が、未完におわっています。先生がドイツ留学からもちかえったもののうちで最重要なものの一つは、いまは精神分裂病とよばれる早発痴呆と躁うつ病とという二大精神病を中心とするクレペリンの精神病学の体系です。だが、『精神病学集要』第二版後編は、てんかん、早発痴呆、躁うつ病、ヒステリーのところまでいっておらず、とくに、先生のちゃんとした早発痴呆論はほかにもないのです。

もう一つ大事なこととして、先生の門下がわが国の精神病学界の第二世代の中心となっているのですが、先生があれだけのはげしい情熱をそそがれた精神科医療改革の志を全面的にうけつぐ門下生をそだてられなかったのです。齋藤玉男、加藤普佐次郎といった人たちは先生の志の一部分をうけついだのですが、わが国の精神病学界の主流とはならず、この人たちの声は呉先生よ

りはずっとちいさかった。そして「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」という論文の存在自体もわすれられていく。

こうみますと、呉先生がわが国の精神科医療の改革・精神病学の建設という面ではたされた役割りはきわめておおきい、わたしなど「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」をしのぐ仕事をわが国の精神病学はもっていない、いや、医学全般をみわたしてもこれと肩ならべる仕事はいくつもあるまい、こうお世辞でなくかんがえているのですが、それでも、精神病学者としての先生は未完成におわった、という感じがつよくします。

3

ところで、先生が医史学にふたたび転じたについては、本来の志がまたおさえがたくなった、とだけみることもできますが、さらにいくつかの要因がかんがえられます。一つは、先生がわが国の精神科医療の現状を徹底的に批判しその改革のために努力された、その努力がどのようなものであったかは、こんどでます『呉秀三著作集』の精神病学篇におさめられた論文をみていただければわかりますが、あれだけ努力されてきたのに私宅監置制度が廃止されることなくそのままのこったことから、がっくりされたのでないか。しかも、その志をつぐ人はいない。そのまえ一九一二年（明治四五年）に先生は、はじめの奥様ミナ夫人とともに重症の腎臓病を発して、奥様をなくされています。一九一七年（大正六年）には、従兄菊池大麓、令兄文聰先生とあいついで没し、みずからはこのころに糖尿病を併発される。再婚されてうまれた二番目の富子さんも一九一九年（大正八年）に、かわいい盛りの三歳でなくなった。このように身内の不幸がつづき自らの健康もそこなわれると、父祖への思慕・ありし日への思いがつのったことと推察されます。こういう経過は年譜および著作量の表をみていただくとよくわかります。

『精神病学集要』の第二版は完結しなかったが、『シーボルト先生　其生涯及功業』は第二版は一〇〇ページぐらいの初

各期における先生の著作量（年平均ページ数）

著作活動期 / 分野	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ
精神科医療	—	6	1	69	17	2	—
精神医学	1	233	89	107	198	110	3
司法精神医学	111	49	48	71	16	7	—
精神医学史	—	3	2	22	10	149	0.0
医学史	—	148	1	16	78	172	460
啓蒙	102	2	—	25	1	2	23
雑	45	109	12	29	18	11	4
計	259	549	252	339	338	453	490

—：該当する著作のないもの

アンダラインしたのは，その期間における主要著作活動分野

各期の分け方

Ⅰ，学生時代（1889—90年）

Ⅱ，助手時代（1891—96年）

Ⅲ，助教授・留学時代（1897—1901年）

Ⅳ，教授・院長時代前期（1902—10年）

Ⅴ，教授・院長時代中期（1911—19年）

Ⅵ，教授・院長時代後期（1920—25年）

Ⅶ，退官後（1926—32年）

版とはくらべものにならぬ大冊となって一九二六年（大正一五年）にだされており、関連の訳本もつぎつぎとだされました。こういう点からしますと、晩年における先生の医学史に関するお仕事は一応の完成段階に達したといえます。ところで、先生の医史学のお仕事は晩年にはほとんど独力でなされております。シーボルトやケンプェルの著書にでてくる地名をあれこれの人にといあわせてしらべてもらったり、そういう意味の助力者は大勢おり、それらの方がたの名は先生の著者・訳書にながながとかきつらねられております。だが中心的な助手を先生はもっておられなかった。そのためでしょう、医史学における先生のお仕事を直接にひきついで発展させる人はいなかったようにおもいます。

また、これは箭内先生もおふれになるとうかがっておりますが、呉先生にかすにあ

と一〇年をもってすれば、おそらくシーボルト伝の第三版ぐらいだしかねなかった。わたしたちの精神科医療史研究会は、先生が書き込み訂正の朱をいれられた校正本をいくつかもっていて、その一つは展示してもありますが、先生は自分の仕事の誤りをただしそれを増補していくことに、たえず努力しておられたのです。

4

さて、わたしの報告をおえるにあたり、もう一つもうしあげなくてはならぬことがあります、このシンポジウムは「呉秀三先生がのこしたもの」と題されています。だが、先生はのこされた、しかし、わすれられていた、というもっともよい、あざやかすぎる例が、「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」であります。

そこで問題は、呉秀三先生がのこされたもの、であると同時に、そこからわたしたちがなにを・どのようにうけつぐか、という問題、じつにわたしたちの問題なのです。死者がのこしたものは、現にいきているわたしたちとの関係性いかんによって、いきつづけもし・無に化しもするのだ、このことを指摘して報告をおわらせていただきます。

注

(1) 呉先生の生涯の詳細については、わたしの『呉秀三――その生涯と業績』(思文閣出版、一九八二年)を、また先生の情熱の源については「その家にかたりつがれたもの――呉秀三先生の鍵体験――」(科学医学資料研究、第九〇号、一九八一年一一月)を参照していただきたい。

(2) 『シーボルト先生　其生涯及功業』第二版(一九二五年)の「はしがき」、『華岡青洲先生及其外科』(一九二三年)の序、先生旧蔵書で現天理図書館所蔵の小關三英訳『鋳人書』はさみこみ紙片にしるした先生の識語など。箕作阮甫については、『箕作阮甫』(一九一四年)中および「洋学の発展と明治維新」(東京帝国大学史学会編『明治維新史研究』、一九二九年)中にあげられている母堂呉せきおよび叔母箕作ちまの談話。

(3) 箕作秋坪については、治郎丸憲三『箕作秋坪とその周辺』(箕作秋坪伝記刊行会、一九七〇年)。

（4）箕作麟祥については、大槻文彦編『箕作麟祥君伝』（呉文聰・丸善株式会社、一九〇七年）、とくにそのうちの清水卯三郎談。

（5）先生が Fr. Oesterlen: "Handbuch der medicinischen Statistik"（1874）を訳出した『医学統計論』は一八八九年（明治二二年）四月一五日の出版であるが、この単行本所載分は『スタチスチック雑誌』第二九号（一八八八年九月）から同第三五号（一八八九年三月）にかけてのった。ところで、令兄文聰はもっぱらイギリスのものをよんでいたが、それではたりぬとドイツ語をならいだしたのは一八八七、八年のころである。一八八九年二月二五日に出版された呉文聰訳述『統計学論』は、Eduard Wappeus: "Einleitung in das Studium der Statistik" の訳であるが、これには「呉秀三校正」とはっきりはいっており、なかばは先生の訳とかんがえられる。つまり、令兄はこのころドイツの統計学書をよみはじめたばかりであった。他方、先生は必要な本をドイツ留学中の森林太郎からときどきおくってもらっており、またドイツ統計学に関する森の学識はいちじるしくふかいものであった。さらに森はエステルレンの原書を所有していた（いつ入手したかは、わからないが）。これらをかんがえあわせると、エステルレンの本を先生がとりあげたのは、令兄のすすめよりは森の示唆によるのでないか、という推定がなりたつ。

（6）同時に内務省衛生局がこの論文を印刷した一冊本の表題は『精神病者私宅監置ノ実況』となって「統計」がぬけているが、本文はじめの題は原題のままである。

（7）このあたりのことは、先生の「日本医学史の序」に「大学に入りて解剖より組織生理より病理と説かず述べざる形質の上にそが妙用真趣を窮ひ得るまでには文学哲学など云ふものに鞍替しその理論や歴史の研究に纏を執り見んと思ったことが一度や二度ではなかった」とあるほかに「文学博士箕作元八君ノ事ヲ記ス」、「藤代君の追憶」（独逸文学、第三輯「故京大教授 藤代博士追憶号」、一九二八年六月）にもかなりくわしくかかれており、また菅虎雄「呉秀三君を憶ふ」（『呉秀三小伝』、呉博士伝記編纂会、一九三三年）もくわしくのべている。

（8）「大澤先生追悼会における追懐談」、鉄門、第六号、一九二七年。

（9）岡田和一郎による追悼講演、『呉秀三小伝』。

（10）「呉秀三・富士川游両先生がはじめてであった頃――わが国医史学の濫觴をさぐる――」、日本医史学雑誌、第二七巻第四号、一九八一年。

（11）富士川は「日本医学史奥書」に、「殊ニ同郷ノ畏友医学博士呉秀三君ハ、余ニ先ダチテ我ガ邦ノ医学史ヲ研究シ、已ニ得ルトコロアリテ一部ノ稿ヲ脱セシガ、任ニ東京医科大学教授ニ就クニ及ビテ、復タ力ヲ医史学ニ専ニスルコトヲ得ザルヲ以テ、君

ガ嘗テ辛苦シテ蒐集セラレタル史料ヲ挙ゲテ、悉ク之ヲ余ニ交附シ以テ大ニ余ガコノ業ヲ助ケラレタリ、特ニ記録シテ同君ノ厚誼ヲ謝ス」とかいている。

本稿は一九八二年三月二七日のシンポジウム「呉秀三先生ののこしたもの」における報告をできるだけ忠実に再現し、文献などを注としてつけた。

（東京）